

「レトリック」試論

神谷正彦*

A Study of Rhetoric

Masahiko Kamiya*

一 はじめ

私たちはふつう、言葉の有限性について深刻に認識することはない。国語辞典にはとても記憶できそうもないほど膨大な量の言葉が収められている。それを見ていると、言葉で表わせないことがらなどないのではないが、言葉にはなにか無限の可能性が秘められているのではないか、などと思う。じつさい、人間は有史以来、自分たちを取り巻くあらゆるものに、事物であれ現象であれ、命名するを行ってきた。経験則にあてはまらない「何か不気味なもの」があったとしてもそれに名前をつけてみるとどうだろう。それも他と選別され分類されて、どこかの抽斗に収まってゆく。命名するというのは、その対象の持つ性質を見抜いて他の似かよったものと一緒にする、つまり「法則」を見出すことに他ならない。この点で、命名することは科学である。

忘れてならないのは、もし仮に、最初の定義が言葉にあったとして、実際にそれを使ってゆく長い運用の時期を経て言葉は時に重層的にまた時に曖昧にさらには錯誤によって変化するというダイナミズムである。今となつてはその由来もはっきりしないという言葉も多いのはそこに原因がある。たとえば「人一倍努力する」とか「負けず嫌いな性格」、よく考えると奇妙な言葉だ。そこにはいくつかの言葉が相互乗入れをしていけば混線を起こしたことがわかる。それでいて私たちは意味を間違えたりはしない。運用の妙、である。また、「お酒」「車」はほんらい総称であったものが、意義の縮小とでもいふべき変化を起こし特定の物だけを区別して表わすようになった。

ここまででは落語でいうところの「さわり」「まくら」であって、私は次へ進まなくてはいけない。

言葉によってある程度定義を与えられたことがらがあつたとして、ではそれを超える、まさに想像を絶する事態に直面するとどうなのか。95の阪神淡路大震災や01の同時多発テロが起こったとき、私たちは「言葉を失った」のではなかったか。事実を事実のままに表現することが易いようではじつは極めて困難な作業なのだ。ただただ「たいへんなこと」起こつたという認識はあつても、それを言い表わすべき言葉が辞書に見つかることはなかった。まさに「未曾有の出来事」であつたのだ。私たちが経験のなから思い描ける想像など、しょせんその程度のものなかもしれない。45八月十五日の天皇の玉音放送を聞いた日本人の、その時の気持ちを表わす言葉があつただろうか。いや、もつと個人レベルの例でもよい。ある日、医師から余命いくばくもないことを告知された瞬間の衝撃を、いったいどんな言葉が正確に表わせるのだろうか。

人間の喜怒哀楽も、度を越してしまつとそれを表わす言葉はおそろしくステレオタイプになってしまうものらしい。まずは、そこが言葉の機能の有限性だということなのであろう。

さてその有限性を克服しようとして私たちはどんな方法を取つてきたか。修飾語を用いる方法がまず挙げられる。修飾語というのはもちろん、単なる飾りではない。日本国語大辞典によれば「体言・用言に対して、その性質、状態、数量、程度などを限定するために他の語を添えること。」とある。飾りではなくて、問題となつている語や語句の意味を「くわしく言い定める」方法を意味する。これによつて言語表現は通り一遍の規格的解釈から奥行きや余情を持つことになり、有限性の枠の外へ大きく踏み出した。例を挙げよう。

○①私はちょうど他流試合でもするようにKを注意して見ていたのです。②私は、私の目、私の心、私の体、すべて私と名の付くものを五分の透き間もないように用意して、Kに向かったのです。③罪のないKは穴だらけというよりむしろ、彼の保管している要塞の地図を受け取つて、彼の目の前でゆっくりそれを眺めることができたと同じでした。(夏目漱石「こころ」番号は筆者)四つの

* 総合教育科

平成十四年九月三十日受理

文は意味をたどるだけなら二つの文だけで十分である。文番号①、③を、それぞれ②、④が詳しく念入りに説明してあるために正確でわかりやすい内容になっている。もしたとえば①において「他流試合でもするように」という修飾語がなかったらどうであろう。短い修飾語ながらも、これは②の内容をほとんど要約してしまっている。そのうえ、「他流試合」に見られるような勝負の緊張感までも漂ってきており、とき澄まされた一瞬のきらめきは、仮に「細心の注意を払ってKを見ていた」としたのではとうてい表わせない。直喩（シミリチユード）と呼ばれる修飾語のもたらす効果はこの引用部分においてはもう決定的でさえある。続けよう。

○大久保の顔は赤鬼が飴玉を飲み込んだように上気し、五分刈りの頭からは汗が粘つくくしたたつていた。広げた鼻の穴からも怒気と怨念が、火放射器のように吐き出されていた。（樋口有介、「もだち」傍点筆者）

修飾語が単なる飾りではないのは、傍点部分を省いてみるとはっきりする。飾りではないし、添えものでもない。作者が写實的に訴えるためにそこにむしろ必然的に用意されるのがこれらの直喩なのである。だから作者にとつて直喩のような修辭（レトリック）を、使うか使わないかが問題ではなく、どのような直喩を用いて読者に真意を伝えるかが大切なのである。小手先の表現技術などではありえない。いや、むしろ直喩を媒介にしなければどうにも言い表わせないことの方が多く、と考えるべきであろう。写実と比喩というのでは一見、水と油のように思えるけれども。

もう一つ例を挙げてこの章を締めくくろう。「ロスト・ジェネレーションの作家」として名高いスコット・フィッツジェラルドは、第一次世界大戦終結後のニューヨークをこんなふうを描いている。

○ニューヨークの街はまるで世界の誕生を思わせるような虹色の輝きにむせていた。帰還した連隊は五番街を行進し、若い娘たちはまるでそれにひきよせられるように、東や北にその足を向けた。アメリカこそが最高の国であり、そこかしこにお祭り気分が充ちていた。（中略）一九二七年のニューヨークのせわしなさはヒステリーの一步手前でも表すべきものだった。（中略）シヨウはますます大がかりになり、ビルはますます高くそびえたち、モラルはますますゆるめられ、酒はますます安価になっていた。（「マイ・ロスト・シテイ」傍点筆者）

ニューヨークは好景気に湧き、栄光と繁栄と退廃とがないまぜとなって人々を呑み込んだ。しかし毎日のように伝えられるストライキのニュースが何かぼんやりとした不安の影を投げかけていたのも、また事実であった。彼はニューヨークのこのお祭り騒ぎを「ヒステリーの一步手前でも評すべきもの」だと、的確な比喩で指摘している。人々の精神的高揚感には確かにやがて訪れる大恐慌の前の、病的躁状態だったのだから。ともかく、繁栄の中でアメリカ国民は皮肉にも精神的飢餓状態にあったことだろう。だからこそ、27にリンドバーグが大西洋無着陸横断飛行に成功した時その快挙を何ら誇ろうとしない謙虚さに、アメリカ国民の「飢餓状態」は癒やされたにちがいない。彼が五番街に凱旋した日の紙吹雪は「マツチ一本でマンハッタンが火事になる」（これも修辭法の一つ。誇張法《イペルポール》である）と言われたほどだったという。また、彼に対する熱狂ぶりは、巨大な宗教が復活したかのような様相を呈した、とも伝えられている。

二

はからずも話題が修飾語から比喩の方へ移ってしまったが、それは筆者にとつてべつだん本意なことではない。たとえ取るに足らないささやかな事実であっても、比喩を効果的に使えば鮮やかな色彩を帯びるものであるし、比喩を媒介としなければうまく説明できない事実というものもある、ということだ。

効果的な表現およびその技術をレトリック（修辭）と呼んでいるが、比喩は代表的なレトリックの一つである。レトリックはその発生期には文学的效果を目的としたものではなく、討論に勝つための実用的な機能を担っていた。論争に負けることが好きではない人にとつてレトリックとは、巧みな言い逃れ、揚げ足取り、言いくるめのたぐいであつて、好感の持てるものではなかった。それは論理の対極に位置するまやかし・ごまかしとして非難の対象であった。しかしその結果すでに古代ギリシアにおいてさえ、弁論で打ち勝つよりも相手に反感を植えつけることなく従わせる、説得するほうがずっと利が大きいことに人々は気づき始めていたのである。そして相手に好感を抱かせるための魅力的な表現としてのレトリックがしだいに重要視されるようになってゆくのである。

修辭体系としてのレトリックは種類は豊富にあるが、中村明の分類によれば

八つのグループに分かれる。

①「配列」の原理にかかわる言語操作の修辞 伏線・対照法・漸層法・倒置法など。

②「反復」の原理にかかわる言語操作の修辞 反復法・おつむ返し・押韻法・対句法など。

③「付加」の原理にかかわる言語操作の修辞 枕詞・列挙法・換言・詠嘆法など。

④「省略」の原理にかかわる言語操作の修辞 省略法・断叙法・省筆・体言止めなど。

⑤「間接」の原理にかかわる言語操作の修辞 二重否定・反語法・皮肉・諷刺など。

⑥「置換」の原理にかかわる言語操作の修辞 カテゴリーの転換を基礎とした比喩・象徴関係の諸技法。

⑦「多重」の原理にかかわる言語操作の修辞 引用法・パロディ・洒落・掛詞など。

⑧「摩擦」の原理にかかわる言語操作の修辞 誇張法・矛盾語法・逆説など。

ここで取り上げようとする比喩法は⑥に属するものである。その分類もしておこう。同じく中村明の分類によって示そう。喩えるものと喩えられるものとの間に何らかの類似性があるかどうかでまず大きく二つに分かれる。類似性をもつ場合の比喩としては、直喩・隠喩・諷喩が基本の三種で、これに活喩・擬人法を加える。次に、類似性ではなく何らかの関係性によって比喩的転換を行うものとして提喩・換喩の二種を加える。この五つの分類にしたがって例を示せば、

直 喩 まるで草箒で雨戸を掃くように、ザツ、ザツと吹降りの音がした。

隠 喩 聴衆は海草チエロは秋の波。

諷 喩 かじとりのぼくが下手だからといって中でおまえがあげられたら、

小舟はひっくりかえって全滅するだけなんだ。(筆者注「小舟」は

「家庭」のこと)

活 喩 真夜中にもサイレンは永く尾を引いて吠えた。

擬人法 花は笑い、鳥は歌う。

提 喩 人はパンのみにて生くるにあらず。

換 喩 農林大臣賞や水産庁長官賞がそろそろ泳いでいる。(筆者注・そうい

う賞を取ったみことな錦鯉が、の意)

ということになる。しかしこれではあまりに大雑把なので、主なものだけでももう少し詳しく見てゆこう。

第一に「直喩」は「明喩」とも言い、ものごとの様子を表現するために

「AはBのようだ」という形式を取る。その場合、比喩であることを示す特定の表現を伴うのがふつうである。「まるで」「あたかも」「さながら」「さしずめ」「ちよつと」「ことし」「みただ」の類。なお喩えられるものAと、喩えるものBとを明確に区別するのが特徴である。例文で言うと「吹降りの音」がAで「草箒で雨戸を掃く」がBとなる。

比喩を表わす特定表現を用いない比喩が第二の「隠喩」「暗喩」ともである。AはBだと単純な形で比喩を示している。

これらの比喩においては、作者が、喩えるもの・喩えられるものどちらの意味もその本質を了解していなければならぬ。しかも喩えるものはほとんど無尽蔵にあるから、作家としての腕の見せ所となることが多い。よく知られている「借りてきた猫のように(おとなしい)」「足元から鳥が飛び立つように(あわただしく去る)」のような一般的な表現を使うが、「恭子は腕組みして雄大を見ていた。まるで女教師がいたずらを見つかった小学生にこれから説教を垂れる寸前のような顔をしている、と雄大は思った。」(柴田よしき)のように具体的で独創性のある表現を作り出すか、読者もユニークな直喩を待ち望む気配は濃厚にあるといつてよい。映画の脚本に目を転じてもよいだろう。人生、その個性一回性ゆえにいろいろな喩え方が出てくる。「人生はチョコレートの箱と同じ。食べてみるまではわからない。」とは『フォレスト・ガンプ』。「人生はまるで長い週末。近づいてくる時はすごく長いように思えるのに、来て過ぎてしまふとけっきょく何もしていない。」とは『モラン夫妻の長い一日』だ。『デンバーに死す時』では「人生は夏休みのようなものだ。待つ間は長いのに来てみるとあっという間に終わってしまう。」

第三は「諷喩」。前の二つとは違って、たとえるほうの概念だけが示される比喩表現である。「豚に真珠」や「猫に小判」という時「豚」「猫」が意味どおりの動物を指すのではなく、「真珠」や「小判」の値打ちがわからない人間を指す、つまりこれらの諺が本来の使い方をされる時、諷喩が成立しているのだ。

「活喩」と「擬人法」は一まとめで第四の比喩としよう。というのは、「活喩」は擬物法と呼ぶべきもので、人間以外のものを人間のこととして喩える点で「擬人法」と重複する例があるからだ。ただ例文では「真夜中にもサイレンは永く尾を引いて吠えた。」の、「吠えた」が人間の動作ではないので、「活喩」に分類するのである。「擬人法」で私の印象に残るのは、

○お品は手桶の柄へ横たえた竹の天秤へ身を投げ懸けてどかりと膝を折った。くぐつたり成ったお品はそれだけでなくも不見目な姿が更に検束なく乱れた。西風の余波がお品の後から吹いた。そうして西風は後で括った穢い手拭の端を捲って、油の切れた埃だらけの赤い髪の毛を扱きあげるようにしてその垢だらけの道筋を剥出にさせている。それと共に林の雑木はまだ持前の騒ぎを止めないで、路傍の梢がずつと繞ってお品の上からそれを覗こうとすると、後からも後からも林の梢が一斉に首を出す。そうして暫くしては又一斉に後へぐつと戻って身体を横に動揺ながら笑い私語くようにざわざわと鳴る。

（長塚節「土」）

身体の不調のためにお品が抱いている不安を、それをあおるかのようにざわざわと落着かない林の梢に喩すること的確に表現している。見事というほかはない。

第五は「提喩」。「人はパンのみにて生きるにあらず」と言つとき「パン」は食物全体を指すのであり、一部と全体、という二者の関係性によって置換操作が行われている。たとえば「彼の頭にもぼつぼつ白いものが混じり始めた。」という文では「白いもの」は限りなく存在する白いモノの中の「白髪」であることを私たちは読み取る。文意を理解することによって、多くの総体の中から特定の一部を選び取ることができる。そこに「提喩」は成立する。もう一例、「空寒み花に紛へて降る雪に少し春ある心ちこそすれ」（枕草子）この「花」は蒲公英でも紫陽花でもない。古典文学ではお馴染みで、単に「花」といえば「桜」しかない。歌意から考えても、他の花ではない。「雪」が「桜」に喩えられている直喩の例でもある。古くは「桜」が「花」を代表するように、「寺」というと「三井寺」を、「川」というと「賀茂川」を指し、「山」なら「比叡山」であった。意味が限定されるのである。

余談になるが、「枕草子」の比喩で思い出すのは第九七段であろう。中宮定子の兄、藤原伊周が今まで見たこともないほどすばらしい扇の骨を見つけたと

言つて喜んでゐるのを清少納言が「さては扇のにはあらで、海月のななり」と鋭く評したというくだりだ。「海月の（骨）」が隱喩になつていて機知のひらめきを感じさせるところだ。

最後の第六は「換喩」である。これは「提喩」のように、喩えるもの・喩えられるものとの間が類似性でつながっていない。ただ、「提喩」ではその両者が全体と一部という包含関係であつたが、「換喩」にはそういう関係性はない。こんな例はどうか。東京で暮らしている息子が帰郷したのを郷里の母が「ほら、東京が帰つて来た。」「息子」と「東京」は包含関係ではなく、今まで見てきたどんな類似性とも違つ、二者の置換になつてゐる。

三

ここまででレトリックのメカニズムはわかつた。次はレトリックの「アート」について述べなければならぬ。その前に、レトリックの歴史といったものをごく簡単にまとめておこう。

アリストテレスによつて弁論術・詩学として集成され、近代ヨーロッパに受け継がれたレトリックは、言語に説得効果と美的効果を与えようという技術体系であつた。（佐藤信夫「レトリック感覚」）

残念なことに日本人にとつてレトリックとは、およそ主題とはほど遠くいかにも奇を衒うまやかし、言葉遊びぐらいの評価を得るほどのものでしかなくなつたやうである。今でも相手の鮮やかな説得に押し切られた側が「それはレトリックだよ。」と言つていかにも一矢を報いた気分になることは多い。もともと説得術を發展させる土壌になかつたこの国の伝統にとつてレトリックは重大な言葉の詐術であつたのだろうか。いやいや、日本人が嫌つてきたのは言葉遊びではなく、勤勉を愛する精神および知識偏重その他諸々の事情が生んだ、「遊び」という名の「創造的ゆとり」そのものなのだろう。ちょっと調べればわかるようなことを大脳のヒダの中に溜め込んで物識りだと呼ばれることに無上の喜びを感じている輩が、あまりに多くあまりに永くこの国にはびこり過ぎたせいですっかり棚ざらしになつてきてしまつた、あるいは、近代ヨーロッパの自然主義文学と同様分類を間違えられたままファイルされてきた、レトリックのすぐれた遊び（創造性）平安の昔には既にその萌芽を認めながら武家社会によつて摘み取られそのままになつてきたを再度育ててみたいと考えるのは私

だけであろうか。

だからと言って、断わっておくが、何も文章作法の類を開陳しようとするのではない。どうぞ手に取って御覧くださいと一見に供するだけである。たとえは三好達治の、

○ 土

蟻が

蝶の羽をひいて行く

ああ

ヨツトのようだ (「南窗集」)

このほとんど直喩法だけで成り立っている詩の持つ創造性をまず感じ取ってほしい、ということだ。喩えられるものや事象がありきたりで特に目新しくなくとも、何に喩えるかは詩人でも作家でももう無限の世界である。そして遊びの世界でもある。「絶望感にうちひしがれていた彼の目に、その時天上から下ろされた一筋の蜘蛛の糸のようなかすかな希望が写った」読む方はああこの喩えは芥川龍之介の「蜘蛛の糸」のもじりだな、とわかるしまたそう気付くことも読むことの楽しさとなるものだ。「相手の男はまるで携帯電話の着メロのようなどこか間の抜けた声を出した」と書けば時代の風俗を取り込むことにもなる。

少し実例を挙げてみよう。

○ 度忘れしたタレントの名前を呻吟して思い出したときは、出そいで出なかつたくしやみを放ったときのようにちよつとした爽快感をおぼえるものだ。

(渡辺容子「無制限」)

○ 遠山は、居酒屋に一人で飲みに来て隣で飲んでいる若者連中に擦り寄ってきた妙なおやじのような口調で言った。(戸梶圭太「アウトリミット」)

○ 得体の知れない無国籍料理を食ひすぎた翌朝の大便のような汚い茶色に、到底理解できない美的感覚により、スパンコールが線状に縫いつけられていた。(同前)

ユーモラスであり、ユニークであり、写実的であつてなおかつ読者の共感を呼ぶことができる表現法としてみると、時には視覚的效果を取り入れながらイメージを豊かにするレトリックは表現主体の作者にとつてもけつておろそかにできないにちがいない。具体的にいうと、喩えるものをどのように表すが、

用語を選ばなくてはならない。作中人物の年令性別習慣職業、生活環境、知的レベルや趣味嗜好の違いで使う言葉もずいぶん違ってくる。若者が「借りてきた猫のように」などという比喩は使わないのがふつうだし、若いとはいえないゆる深窓の令嬢に下世話な比喩はそぐわない。小学生は「陪審員の評決を待つ弁護士のように」と言つても理解できない。また何か深刻な問題に直面しているような状況で能天気なあるいは幼稚な比喩は使えない。

逆に、おどおどして落ち着きのない子供を「いたずらが見つかった時の子供のように」と喩えるのなら違和感はない。大気圏に突入したスペースシャトルとの交信が再開されるまでの緊張した時間を「時計の針が少しずつ生命を削つてゆくような時間」と書くとも臨場感が出る。また、何一つ話し合いが進展せず行き詰まりの状況を喩えて「時間だけがまるで掬った砂が指の間からサラサラとこぼれ落ちてゆくように空しく過ぎて行く」と言つたり。

私が調査した範囲の小説やエッセイでは、最近のものほど比喩は具体性を持ち、新しくなつてきているし、作者独自の創作による比喩がめだつて多くなっている。昔からよく使われる格言や諺の比喩的言い回しはやや少なくなつた。これは日本の文化が変質して、古典の知識も読書量も少ない若者文化が台頭してきたためなのだろうか。ともかく、読者層も大きく変化してきているのだ。ノワール(暗黒小説)がジャンルとして確立したことがレトリックのあり方に与えた影響は無視できない。より刺激的で「まるで破裂寸前の膀胱を抱えてトイレに向かつて突進していくようなひどく急いだ足取り」⁽²⁾、では、いささかお行儀がよろしくないが、「直径五十センチのつららで心臓を貫かれたような恐怖」⁽³⁾、「彼らは絶望の殻の中で徐々に孵化していくシヤム双生児の爬虫類のようであつた」⁽⁴⁾、といふふうに、誇張されるもの、おどろおどろしいものが現われるようになった。比喩表現も時代の風潮を反映して変化していることを認めざるをえない。

注(1) 犯罪者の視点に立ったものや過激な暴力を盛り込んだリアルなミス
テリの呼称。

(2) 渡辺容子「無制限」

(3) 戸梶圭太「アウトリミット」

(4) 梁石白「子宮の中の子守歌」

清水義範に「ことばの国」という作品集がある。その中の「手垢のついた言いまわし」でこう訴えている。すっかり慣用句になってしまったような手垢のついた言いまわしを多用していると文章の緊張感失われてゆく。必要なのは、比喩のうまさ豊かさというのは文章のうまさの要素なのだ認めたと、新しい言いまわしを作り出すことだ」と。これは十年一日のごとく定番となつた言いまわしに安住しているマスコミに対する批判である。古くからある言いまわしだからそれを捨てると言っているのではない。当然のことである。「降るような満天の星」や「天使のような笑顔」「玉のような男の子」「鈴をころがすような声」こんな比喩では駄目だというのではなく、毎年同じニュースを流しておいて「海岸は足の踏み場もないほど混雑していました」などとニュース同様、何の工夫もない言いまわしでお茶をにごすな」と訴えているわけである。もつともな意見である。言葉についての恐ろしいほどの手抜き工事がもうずいぶん長く行われてきているのだ。「このことの責任はマスコミ人、とりわけ、コピーライターと、官僚に求められるべきであろう。前者は伝統的な言いまわしを悪むだけの換骨奪胎で貶めており、後者は事実を歪曲し誤魔化す用語をばびこらせている。さらに困つたことに、それらの冒流行為に対する、受け手側の恐るべき無関心が横たわっている。

だから、新しい言いまわしを創り出すことと同様、今まで私たちが歩いてきた道の路傍にいくつも見えていた由緒正しい言いまわしを思い出すことに努めなければならぬ、と考える。その出発点が、言葉の有限性つまり事実を事実としてありのままに表わすことの困難さである。そこから、一つ一つの言葉は有限であつても、組み合わせることで事実と近づけるのではないか、あるいは、求める事実と一見何の係わりもないような言いまわしがむしる射るものなのではないかと私は考えている。

医師から、余命がいくばくもないと宣告されたとしたらその時の気持ちをどう表現するのが最も適切だろうか。同じことが別の人に起こつた場合であつたら、手記を読んだり映画を見たりあるいは本人自身の口から聞いたりするだろう。その立場に同情し、心を痛めるだろう。しかし、それは必要ならば頭の中から追い払つてしまうことができる。自分は安全であり、言ってみれば一般的な社会現象に対する認識のコードに沿つた、社会的に妥当で健全な反応の域を出ない。では、自分の身の上で起こつたとしたらどうであろう。一回きりの経

験、きわめて特殊で個人的な経験として。「私は医師の宣告を聞いてひどいショックを受けた。」と書いて的確だと言えるか。事実めかして書いてはいるが、これはまず、支持できまい。比喩法を使うとどうなるか。映画「ドクター」のなかで、ある人物が医師から脳腫瘍のため余命が残り少ないと告げられる。彼女は病院の屋上に上がり、「全身の皮膚が剥がれ落ちたような気持ち」になつたという。こういう場合の表現としてはかなりユニークなのだが、これならしつかり腑に落ちるのだ。「丸太で頭を殴られたような」「なにかとても悪い夢を見ているような」「いきなり地獄へ突き落とされたような」という例も同様で、繰り返すが、自分だけの経験は自分だけの表現、創造的表現でなければ他人に理解させることは不可能だと考えざるを得ない。

まったく別のケースで、藤原道長の例はどうであろう。関白の位に上りつめ、娘彰子を一条天皇の中宮に擁立した彼を評して「道長は得意の絶頂にあつた」では、あまりに月並みであろう。彼の得意ぶりは例の歌、

○この世をば我が世とぞ思ふ望月の欠けたることのなしと思へば（藤原清輔「袋草紙」）が遺憾なく伝えている。自分を「望月」に喩えてしまふ、ほとんど無邪気とも思える傲慢さにこそ、彼の得意ぶりが生き生きと表わされているのだ。上の句は平凡そのもので印象も弱いものだが、下の句になると俄然熱い思いが伝わってくる。換喩による効果はきわめて大きい。

四

これまで比喩を用いて独創的表現技術が発揮される点を考察してきたが、比喩による表現効果として佐藤信夫が指摘している「あべこべの直喩」にもふれておこう。

「ふつうは、喩えられるものの性質状態についての知識理解がまず前提として在り、その類似的連想をはたらかせることで喩えるものとの関連を知つていく。その結果、喩えられるものより深い理解を得るのである。つまり A はまるで B のようだ は、「A」についての理解が、「B」を持ち出すことによつて、「A」の一般的解釈とは異なる視点からのアプローチを得、「A」への理解を深めるという図式になっている。しかし、必ずしも前提となる「A」についての理解が十分でないという場合、「B」の意味から類型的連想がはたらいてはじめて「A」の内容を理解することもままあるのだ。」と述べている。これ

は、たとえば、

○閉じた口の中、息の温みでチョコレートがやわらかく融けていく舌触りは、波打ち際に素足でたたずんで、くるぶしを包む濡れた砂が波に連れ去られていくときのくすぐったさに似ている。(重松清「五月の聖ハレンタイン」)

というとき、喩えられるほうの前者にピンとこなくとも、喩えている後者がわかれば逆に前者を十分イメージできるはずである。読者の知識には個人差があるのがむしろ当然であるから、喩はその差を埋めるためにもたいへん有効な表現技術になりうるのである。

ただし、直喩の発展形として A は B のようだと、という基本形に「な B のようだ」のように修飾語を加え、B の意味をいっそう詳しく表わそうとする場合もある。「彼女は大理石のように滑らかな肌の持ち主であった。」がそれである。もっ少し長い表現では、

○なんというか、すべての言葉が「1+1=2」や「太陽は東からのぼって西に沈む」のごとき永遠不変の真理であるかのように耳に響くのだ。(重松清「失われた文字を求めて」傍点筆者)がその例である。傍点部分は(あるいはその前句は)同じ意味で前句(あるいは傍点部分)と並べられており、ここが一種の強調表現を形成している。それは同内容の語句を反復させることによる強調である。もっとも、数としてはこういう例は少ない。

ところで本稿では小説や随筆、詩の中に喩の用例を求めてきた。それは合理性を重んじる論説文や、事実に立脚すべき記録文では喩そのものが用いられないのがふつうだからである。たとえば半藤一利は「真珠湾の日」のあとがきでこのように述べている。「戦争の本質や、真の恐ろしさというものは、きまりきった頭ごなしの論ではとても掴みきれない。できるだけ多くの事実を探求することがまず第一であり、その上で可能なかぎりリアリティックに観察し考えねば、ほんとうのところはわからない。」「このような執筆方針で書かれたものに、類似的連想の力を利用する、喩の手法がとり入れられないのは当然である。だが、戦争は国家の存亡をかけた極限状況である以上、未曾有の事態はそこかしこに現われてくる。そんな時人間は事実を表わすべき言葉を失い、喩の力を借りなければならなくなるであろう。」「歴史の流れはすでに滔々として、だれによっても止めるべくもないほどの激流となっている。個々人の反対など、元首相の海軍大将米内光政がいうように、ナイヤガラの瀑布に逆行して

孤舟を漕ぐような、はかないものであったのである。」「(前掲書)これは同書で四例ある喩のうちの一例である。稀少だけれども例が皆無ということではない。それならば喩法の将来の、新しい可能性と言えなくもない、あくまでも可能性の話であるけれども。

さて本稿を締めくくるにあたって、少しさかのぼってしまおうが、喩の力＝言葉の力ということほどなんに強調しても足りないことの一つなのである。丸い卵も切りよつて四角、などと俗に言うけれども、何を見、何を聞くにつけてもこわいのには単眼の思想というものである。そもそも人間自体が複雑きわまる存在なのに、その人間が作り出した社会となるとさらに複雑で怪奇でさえある。単眼というのは、物事を真上からとか真横からとか一方からしか見えない。だから全体を見誤るし、複雑な諸相にまで思いが至らないのである。

五代目古今亭志ん生の噺を聴いて寄席の客が拍手喝采するのは、単眼陳腐の弊を彼が話柄の急転や奇抜な喩であざやかに脱け出してみせるからである。特にその喩はひとの意表を突くものが多く、それでいてひとりよがりになっていない。創造性において、余人のかなうところではない。最後に長くなるが引用しておこう。長屋住まいの、年季の入った夫婦の会話である。

○「おまえはまたひとが何か言うてえと百万年前のとかげみてえな面しやがつてやな女だなア」(中略)「大きな声だねエおれはお前の鼻の頭の前に居るんだよ、家の中で船を見送るような声出しちゃあいけねえよさくつて。」(中略)「お前さんの言うことはどうも聞いていやな心持ちだねえ、股倉から手突っこんで背中描くようなもんだ。……自分を出るとどこかへ引っかかるうと考えてやがるんだらう、出ると引っかかる(筆者注・外出すると寄り道したがる)ことばかり考えてやがる、ざま見やがれ上げ潮のこみ。」(中略)「女房？女房っていうほどのもんじゃねえんだよ、お前なんざ、シャツの三つ目のボタ、みてえなもんだよ、あつてもなくてもいいんだよ。(中略)それをこの女は親の仇に出くわしたような驚いた顔しやがつて(中略)お前の顔はね、人を寝かす顔じゃないってんだ。寝てる奴が飛び起きてかけ出す顔だてんだ。」(「風呂敷」傍点は筆者)

注記

本稿で引用した比喩の例は、筆者が収集したものの一部である。引用したものも含めて別の機会に紹介する予定であることをお断りしておく。

参考文献

- 日本国語大辞典 小学館・一九七四
夏目漱石全集 岩波書店・一九六六
樋口有介「ともだち」中央公論新社・二〇〇二
スコット・フィッツジェラルド「マイ・ロスト・シティ」中央公論新社・一九八四
中村明「比喩表現辞典」角川書店・一九九七
柴田よしき「Close to you」文芸春秋・二〇〇一
長塚節「土」新潮社・一九七四
新潮日本古典集成「枕草子」・一九七八
佐藤信夫「レトリック感覚」講談社・一九九二
三好達治「南窗集」新潮社・一九六五
渡辺容子「無制限」講談社・一九九八
戸梶圭太「アウトリミット」徳間書店・二〇〇二
梁石日「子宮の中の子守歌」青峰社・一九九二
清水義範「ことばの国」集英社・一九九三
増補新版「日本文学史2中古」至文堂・一九七五
重松清「五月の聖パレンティン」角川書店・二〇〇二
同「失われた文学を求めて」同前
半藤一利「真珠湾の日」文芸春秋・二〇〇一
古今亭志ん生名演大全集 ボニー・一九八七